文学と仏教との接点について

――存在論と時間論による考察――

見　理　文　周

一

従来わが国の文学者と仏教者との間には、文学と仏教とは本来異質なもので、次元が違い、共存できないものだという一つの通念のごときものがある。とくに近代文学を専攻する場合、その軌跡が自己暴露や伝統打破の自然主義を主流とするために、研究がそのまま仏教の教理やモラルに離反していくことを避け難い運命にあり、文学と仏教との相反性や不調和性をあまりにも歴然と認識せざるを得ないのである。(1)

しかし、このような状態の下では、たとえ作家の作品に仏教的な（あるいは反仏教的な）描写を指摘したり、題材の仏教的色彩を拾い上げてみたところで、何の意味もないだろう。それは文学と仏教との断絶や離反を逆説するだけのことになりかねない。事柄を主体と客体とに分離し、二者択一的方法に終始する近代科学的な研究方法は、実態や問題を全体としてとらえ、相対的存在に止揚して考察することが出来ない。つまり、形而下的な思考や作業によつては、文学と仏教との接合や離反を真に把握することが不可能なのである。

ところで、文学と仏教において共通していることは、共に人間存在の在り方に深くかかわり、人生における己れの生き方について、探求と凝視を深める点である。そして、その研究において重要なことは、その事柄自体の意味を探り、奥深く隠された心理構造を実存的にとらえる姿勢であろう。次元を異にしながらもこの両者は、接合と離反を繰返すことの中で密接に連なる、弁証法的な契機をもつているからである。

したがつて、この両者の関係を、従来のように断絶したものとして否定するネガティブな研究の姿勢によつてではなく、相互に牽引されつつ反発し合う激しい緊張関係としてとらえ、むしろポジティブに両者の結びつきを発見し創り出していく志向によつて、把握すべきではないであろうか。

事実、今日においては、文学と仏教との密接な関係――二律背反の永遠の命題を背負いながらも、お互いを友人とも、武器とも、否定的機能や矛盾的契機ともして打返す実存的価値――を否定し得ない、現実的な事実が現われてきているのである。(2)

二

ところで、仏教の出発点が釈尊の出家であり、それが人生を如実に眺めることであつたことは、今さら言うまでもない。釈尊はこの人生凝視によつて縁起の立場を発見し、一切の現象の実相を相依相俟関係の原理によつて説明された。十二支縁起の相依性、相関性、因果性――つまり〈相対主義の存在論〉である。

周知のように、これによれば人間存在は名色と識とによつて成立ち、この関係を説いたのが色・受・想・行・識の五蘊仮和合説である。また、この色を構成する要素として地・水・火・風の四大（四界）があげられ、これが、この自然世界とともに一切の生物を形作る元素だと説かれていることも、周知のことである。さらに、この五蘊の説は、人関存在をその生因と滅因によつて考察することによつて、人間の有限性や苦悩の根拠を指摘した、いわば〈無常の存在論〉というものになつている。

ところで、ここから文学との係わりを引出すための媒体として、ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard. 1884～1962）という、ソルボンヌ大学名誉教授の存在論をとり上げてみたいのである。

バシュラールは、〈精神（エスプリ）の産物の極北に立つもの〉としての〈科学〉と、〈魂の産物の最も純粋なかたち〉としての〈詩〉との対立的共存を基本的図式として、「この二極間のダイナミックな運動がつくり出す弁証法的生成」を説いている。とくに異なる想像力のタイプを、四つの基本的物質――つまり地・水・火・風の四大――によつて分類し、「四元素の法則」なるものを提唱している。すなわち、『火の精神分析』（一九三八）、『水と夢。物質の想像力に関する試論』（一九四三）、『空気と夢。運動の想像力に関する試論』（一九四四）、『大地と意志の夢想。力の想像力に関する試論』（一九四八）、『大地と憩いの夢想。内密性のイマージュに関する試論』（一九四八）、『蠟燭の焔』（一九六一）等の著作において、文字通り火・空気・水・大地をとりあげ、そのいずれに結びつくかによつて人間の想像力が決定されると説いているが、これはバシュラールが、人間存在の実質を〈たえず未来を獲得しつつ生き、そうすることではじめてわれわれの生を真に生きるもの〉としてとらえ、〈一瞬ごとに未来に向つて生成してゆくもの〉として、想像的世界の自立を主張しているのである。

文学を攻究する者にとつて、このバシュラールの発想が実に重要な意味をもつのは、およそ文学作品の成立においては、人間の深層意識としてのコンプレックスや〈原風景〉が作者に詩的イメージを与え、芸術作品を創造させ、その作者の本質や作品の個性を形成することが、今日においては文学や心理学上の常識だからである。

これは、つまり、原始仏教において物質構成の四元素とされた地・水・火・風が、バシュラールにおいて更に拡大解釈されて、〈たえず生成してゆくものとしての人間〉の想像力の根源にまで広げられたということである。そして、このような考察は、文学と仏教との関係を有機的にする媒体として、吾人の既成の仏教知識を生きて躍動したものとして甦らせ、接点の役割を果たしているように思われるのである。

三

次に本来、創造的な営みであるべき人間の生が、現代社会においては、ともすれば形式化し、画一化しがちである。人間の思考や方法のパターンは固定化し、生命のある発想と飛躍的な判断や行動は硬化しがちである。いわゆる〈人間疎外〉や〈閉塞〉の状態であり、文学的に言えば〈詩情（ポエジー）の喪失〉現象である。

思うに、これは連続的時間の惰性から生じた現象であるから、恢復のためには、時間の本来的な認識を取戻すことが必要であろう。つまり〈刹那における永遠、永遠における刹那〉という、時間を非連続的なものとして把らえる仏教的思惟である。

すでに原始仏教において、時間は「慎みて過去を念ずるなかれ、また未来を願ふことなかれ、過去のことすでに滅し、未来いまだ来たらず。現在所有の法、かれまた、まさに思ひをなすべし」（中阿含、巻四三）と思惟され、華厳思想においても、「諸存在はみな一時に成立する」「永遠とは一瞬のことである。一瞬とは永遠のことである」「時と存在とは相離れないものである」（法蔵『五教章』）などと説かれている。

とくに道元禅師が『正法眼蔵』において、その「有時」「生死」「全機」「現成公案」等の巻に繰返してその〈時間論〉とも言うべきものを説かれていることは、周知の通りである。すなわち禅師は、「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」として、存在即時間という〈時間的存在論〉の立場を示されており、「われを排列しおきて尽界とせり。この尽界の頭頭物物を時時なりと覿見すべし」「有草有象ともに時なり。時時の時に尽有尽界あるなり」と、われわれも世界の一切のものも、悉く時間的存在だとされている。

さらに禅師は、時間は飛び去るものでも過ぎ去るものでもなく、常に自己と共に存在し、自己の体験によつて実現され

るものであるとして、それがすべての人に普遍的な時間（有時の而今）であり、この一瞬一瞬に成立し、一瞬一瞬に完結する充実した時間を生きることが、いわゆる〈前後際断の絶対現成〉という人間の最高の体験であることを、つまり〈刹那における永遠、永遠における刹那〉（尽時の永遠）という時間の重要性を力説されているのである。

さらに、これを文学的に言えば、このような認識は、実在を一回限りの生命として把らえる方法であり、時間を純粋持続とする考え方の否定である。それは経過する時間の中に曖昧な虚像を求めず、瞬間の一点において全生命を開顕し、燃焼しつくすことである。また自分が内包してついにその重みに堪えずに発現する、たった一回限りの自己完結的な充溢した現実であり、物と時間、時間と人間とが、瞬時に一枚になつて生命を現成した状態――いわば激しく火花を散らす放電現象――として、詩の誕生する瞬間なのである。(3)

四

これと同じ立場に立つ思考の実例として、再びガストン・バシュラールの〈時間論〉（「詩的瞬間と形而上学的瞬間」）について述べてみよう。

すなわちバシュラールによれば、時間は「孤独な瞬間」として存在し、「瞬間の現実というただひとつの現実をしか持た」ないという。彼は時間を「瞬間の中に閉じこめられ、二つの虚無の間につるされた現実」として、「瞬間こそが、時間の真に固有の性格」であり、時間が「本質的には非連続」なものであることを述べて、ベルグソンの純粋持続としての時間と対比して「瞬間の直観」の現実性を主張している。そして、「実在するものは現在の孤独な瞬間のしるしから絶対に逃れられず、あらゆる変化と生成は一瞬一瞬を利用していくだけ」という、彼の存在論的な〈時間論〉の立場を示しているのである。

このことは、時間を質的に、一回限りの断絶的非連続としてとらえた、キルケゴールの「瞬間」の考え方を受継いだもので、〈水平的〉な普通一般の時間の考え方と区別して〈垂直的〉な時間を示し、そこに詩情（ポエジー）の源泉を見ようとしているのである。(4)

すなわちバシュラールは、「詩情（ポエジー）は瞬間化された形而上学である」と言い、「それは、短いひとつの詩の中に、全宇宙の展望と、ひとつの魂の秘密、ひとつの存在の秘密、そしてさまざまの対象の秘密をすべて同時に与える」とする。このような彼の考えによれば、詩情（ポエジー）は「ただ瞬間をしか必要とせず、その不動化された瞬間の垂直な時間において」のみ、「みずからの特別な活動を発見する」のである。したがつて、その孤独な瞬間だけが「美の生み出される唯一の場」であり、時間

の本性と美の本性との重なり合う時だという、彼の〈瞬間の美学〉が説かれ、しかもそこから、美とともに「あらゆる道徳もまた瞬間的」であるという一つの結論が導き出される。それは詩人が、主観と客観、エゴイズムと義務といった二元論によらず、「同じ瞬間の中に、形式と人格の連帯性を同時に啓示する」からであり、その時に詩情（ポエジー）は、「人格的力のひとつの瞬間となる」というのである。

ここに至ってバシュラールの〈瞬間の美学〉は、主客分離の近代科学的認識方法とは異り、自他の係わりを相対的存在としてそのまま把えらえる仏教的認識や、人間の時間性（歴史性）や空間性（風土性）を一元的に探求しようとする文学一般に連なる、重要にして微妙な契機をもつことが明確になるのである。つまり、文学と仏教との接点が、ここにも存在することを示しているのである。

（1）近代リアリズムは文学を科学的に分析しようとして行詰ったとされる。

（2）第二次大戦後、いちじるしく宗教的志向や実存的自覚を示す作品や著作が現われて、新しい宗教的文学の地平を拓きつつある。

（3）言葉は一回限りのものであり、沈黙の充溢から生まれてまた沈黙に帰ってゆくがゆえに恒に新しい、とマックス・ピカートは言っている。（『沈黙の世界』）

（4）ヘーゲルが時間を空間的に、永遠の中での継起的連続性としてとらえ、カントが量的に、主体の感性の直観形式として把らえたのと対比されている。

新刊紹介

平川　彰編

「仏教学」創刊号・第二号

A5判・本文各一二〇頁・年二回刊行、年会費一八〇〇円
山喜房仏書林・昭和五十一年七月二十五日、十月二十五日刊

舟橋　尚哉著

「初期唯識思想の研究――その成立過程をめぐって」

A5判・本文四〇〇頁・定価四五〇〇円
国書刊行会・昭和五十一年三月十日刊

平井　俊栄著

「中国般若思想史研究」

A5判・本文七四五頁・定価一〇〇〇〇円
春秋社・昭和五十一年三月三十一日刊